

浦賀文化

平成29年(2017年)10月1日

第51号

Email:uragabunka@yahoo.co.jp

とうだい 燈台へ行く道

西脇順三郎と観音崎

大正・昭和時代の詩人、英文学者。幼少の頃は文学より絵画を好み、水墨画をよくし、東山と号した。語学の才に恵まれ、日本語のみならず、英語やラテン語でも詩作し、海外でも評価が高い。



西脇順三郎詩碑

あらわれます。この作品には、不思議な自然の命に対する感動とともに人間の温かさが読み込まれています。

詩碑の建立場所は、バス停「観音崎」で下車、海岸に沿って灯台へ向かう途中にあり、説明用の石碑とともに東京湾に面しています。碑文には、『燈台へ行く道』の前半部分が刻まれています。今回は、その後半部分をご紹介します。

詩人西脇順三郎は、昭和二十四年(一九四九年)の晩夏、長男の順一氏の遠足に同行し、観音崎を訪れました。この地をモチーフにした『燈台へ行く道』は、昭和二十八年に刊行された詩集『近代の寓話』に収められています。この『燈台へ行く道』は、難解といわれる西脇作品の中にあつて、分かりやすい作品といわれています。それは、もともと少年雑誌からの依頼で書かれたことによります。

やぶの中を「たしかにあるにちがいない」と思ってのぞいてみると
あの毒々しいつゆくさの青い色もまだあつた
あかのまんまの力も弱つていた
岩山をつきぬけたトンネルの道へはいる前
「こべら」という木が枝を崖からたらしめていた
実のついた小枝の先を折つて
そのみどり色の梅のような固い実を割つてみた
ベルシャのじゅうたんのようになつて赤い
種子がたくさん 心のところにひそんでいた
暗いところに幸福が住んでいた
かわいい生命をおどろかしたことは
たいへん気の毒に思つた
そんなさびしい自然の秘密をあばくものでない
その暗いところにいつまでも
かくれていたかたのだろ
人間や岩や植物のことを考えながら
また燈台への道を歩きだした

西脇順三郎は、明治二十七年(一八九四年)、錦鯉や小千谷縮で知られる新潟県小千谷市

に生まれました。少年時代から絵が好きで、将来は画家になることを志し、十七歳で小千谷中を卒業すると、上京して藤島武二や黒田清輝といった当代一流の画家を訪ねています。しかし、一家の生計を支えていた父の急死などの事情により画家への道を断念し、慶應義塾大学理財科へ進みました。その後、英文学の研究を志し、イギリスのオックスフォード大学に留学しました。

留学中に再び絵筆を握る傍ら、大正十四年(一九二五年)に英文詩集『Spectrum(スペクトラム)』を刊行しました。同年に帰国し、翌大正十五年には慶應義塾大学の文学部教授に就任しました。

当時の西脇は、新しいヨーロッパ文学の豊富な知識を背景に、『三田文学』や『詩と詩論』を通じて活発な批評活動を展開したといえます。

また、詩集『月に吠える』で知られる萩原朔太郎の作品を通して日本語の可能性を見出したという西脇は、昭和八年(一九三三年)、二十九歳の時に詩集『Ambaryalia(アムバルリア)』を発表し、モダニズムによる画期的な詩風を樹立しました。終生にわたり「眼の詩人」、「視覚の詩人」と呼ばれたのは、根底に少年時代の画家志望という夢があつたからだと思われまふ。

その後、昭和二十二年(一九四七年)に自分の内面に潜むもう一人の人間を「幻影の人」と名づけ、作品『旅人かへらず』

とこれに続く詩集『近代の寓話』、『第三の神話』の中で追求し、西洋的教養と日本的感性を融合させた独自の詩風を築き上げました。

さらに、一九六〇年代に入つて、長編詩集『失われた時』をはじめ『豊饒の女神』、『えてるにたす』などの一連の詩集により西脇自身の詩風は頂点に達し、文豪・谷崎潤一郎とともにノーベル文学賞の候補にも名を連ねました。

七十歳代に入つても創作力に衰えを見せず、旺盛な想像力は、『礼記』、『瓊歌』、『鹿門』といった詩集を生み出したのみならず、さらに八十歳代には詩集『人類』と『定本西脇順三郎全詩集』の刊行をみましました。

こうした西脇の業績をたたえ、横須賀市は、平成六年に観音崎に第十二号文学碑を建立しました。このときには、ご子息の順一氏をはじめ西脇ゆかりの詩人や研究者(明治学院大学副学長の新倉俊一氏、当時)ら、多数の関係者が除幕式に参列しました。

また、西脇が残した文学や絵画の作品は、郷里の小千谷市立図書館や東京の世田谷美術館、葉山町の神奈川県立美術館などに納められています。

※本文は、西脇順三郎文学碑建立記念パンフレット(横須賀市)に加筆しました。
(芳賀久雄)



歴史 語りい座 浦賀奉行所編 その一

郷土史家 山本 詔一



●奉行所開設●

十七世紀後半、日本の経済成長はめざましいものがあり、国民総生産は江戸幕府が開かれた時と比較すると数倍にも増した。この豊かさが元禄文化に反映し、浦賀の干鰯問屋が急成長した時期でもあった。

こうした状況のなかで、特に目を引くのは東北地方のお米の生産量であった。これまであまり市場にでることがなかった東北地方の余剰米が、大消費地であった江戸に運びこまれるようになった。このあたりをもっとも受けたのは、生産力を何も持たない武士であった。武士の大半は給与をお米でもらっていたので、自分の家で食べる分は残し、残りは米屋に売り、そこで得たお金で生活を営んでいた。しかし、江戸に大量に運び込まれたお米の価格は安定せず、生活は常に不安定な状況であった。

物は下つてこないの「下らない」といった。これが現在の「下らない」の語源である。

吉宗が着目したのは、それまで西からの物資だけに目を光らせていた伊豆・下田奉行所を、西からも北からも運ばれてくる物資に目が届く場所へ移転することであった。

移転先の調査が始まったのは享保五年（一七二〇年）の春のことであった。当時の下田奉行であった堀隠岐守利喬は陸上から相模湾沿いに、船手奉行であった向井将監正員は海上から候補地選びを始めた。両者の意見が一致した場所が「浦賀」であった。

そこで、奉行所や、船の検査をする番所の位置、与力・同心と呼ばれていた役人たちの住居エリアなどの計画図が作られた。せまい東浦賀にこれらの施設を配置してみると、干鰯問屋で栄えていた東浦賀村のほぼ全域が対象地となっていた。

東浦賀村は石高（年貢の対象となる村の総生産高）が六十二石余りと小さな村であったが、干鰯問屋を中心にした三浦半島随一の商業都市で、八十近くあった三浦半島の村でもっとも裕福な村であった。ここに奉行所の施設を置くということは、東浦賀村から干鰯問屋を含む、全ての住民の立ち退きが条件となるものであった。計画を知らされた東浦賀の住

民が奉行所設置反対運動を繰り広げたことはいまでもない。東浦賀の住民は、伊勢原の大山へ行き護摩供養をして氣勢をあげ、鎮守の叶明神を祀る明神山に立てこもって反対運動を繰り広げた。この結果、住民との調整がうまくできなかった代官・遠藤七左衛門は更迭された。次の調整役についた代官の河原清兵衛は再検分して、三度目の計画案でようやく、西浦賀の現在の跡地に、奉行所や船番所、役人の住宅が置かれることが決定した。

享保五年九月、奉行所や船番所、役人の住まいの建設が始まった。しかし、移転完了までの期間は四カ月ほどしかなく、どのようにして完成させたのであろうか。

また、下田を引き払う役人たちにも「立つ鳥跡を濁さず」のたとえのように、下田に借金などを残さぬようにとの通達がでた。

俳句の散歩道

夏祭墨痕淋漓 田島耕史

黒船の影枕辺に明易き 大塚遊球子

笑話一題

黄昏おじさん

おじさんは寂しかった。清少納言の昔から「秋は夕暮」なのだ。綺麗な夕焼けを見ながら「ものあはれ」を感じてしまうおじさんであった。西行の歌にも「心なき身にもあはれは知られけり 鳴立つ秋の夕暮」とあるではないか。

俳句の秋の季語に「身に入む」というのがある。体にこたえる、深く感じる、しみじみと感じるという意味だが、特に秋の冷気やもの寂しさについていう。

野ざらしを心に風のしむ身かな 芭蕉
来年六十五才になるおじさんも身にしむことが多くなってきた。で、どうするかというと、いつもの店で酒を呑むのだ。まあ一年中呑んでるけどね。
此の道や行く人なしに秋の暮 芭蕉
(酒呑童子)

第24回浦賀コミュニティセンター分館特別企画展示会

絵図で解く 浦賀奉行所の謎

浦賀奉行所開設の経緯など、今まであまり知られていなかった奉行所の「謎」を建物の変遷とともに解き明かします。

〈日時〉平成29年10月28日(土)～11月5日(日)
10時～17時 **入場無料**
〈会場〉浦賀コミュニティセンター分館
(郷土資料館)

※詳細は、広報よこすか10月号、ポスター、ちらし等でご確認ください。

